

## 『農業経済学講義』

山崎 亮一 著

農業・農村領域 研究員 曲木 若葉

農業は歴史上最も長く、かつ、人間の生存に不可欠な食糧を生産するというその性格上、いつの時代も人間にとって基幹的な産業であることは論を待ちません。対して、経済学の一部門として農業経済学が登場したのは、19世紀後半以降とごく最近のことになります。

本書のタイトルは『農業経済学講義』ですが、農業経済学についての解説を始める前に、一般経済学についての解説を、その誕生から農業経済学の登場に至るまで4章にわたって行っています。ところで、経済学はイギリスの経済学者アダム・スミスから始まりましたが、経済学の誕生も、かなり近年の18世紀に入ってからとなります。経済学が始まった背景には、この時期に商品経済化が進み、モノの生産方法がそれまでの自給を中心としたものから、だんだんと資本主義的生産（本書では資本制的生産）へと転換しつつあったことがあります。資本主義的生産とは、一般的な会社組織にたとえるならば、資本家、労働者、土地所有者（地主）に分かれながら商品生産を行うことを指します。そして経済学は、商品生産が資本主義的に行われていることを前提としながら、その法則制や理論を解明する学問として展開することになります。

しかしながら、資本主義化の進む国が増える中で、大きな問題が生じてきます。それは、イギリス以外の資本主義化の進んだ国では、農業がなかなか資本主義的生産に移行しない、ということです。つまり、国全体としてみれば、工業を中心に資本主義的生産が急速に進展する一方で、農業は自給をその主たる目的とした、自営農民によって生産が行われ続けていたのです。このことを農業問題といいますが、そのために農業は、通常の経済学の法則性や理論では解釈できない独特の問題を抱えた産業として展開することとなります。しかも資本主義化が始まったばかりの国は、国民の大半が農民であり、また農業は国民の食糧を供給するという重要な役割を担っています。こうした中、農業問題の解明を使命に登場し

た経済学の一部門が農業経済学です。本書の前半～中盤はこの一連の流れを、順序立てて丁寧に説明しながら、具体的にどのような問題がいかんして生じているのかについて解説しています。

また日本も例に漏れず、長らく農業問題を抱え続けていますが、近年は農家数の急減とともに、水田農業についても法人経営の展開が見られるようになりつつあります。つまり日本農業も、いよいよ農業の資本主義的生産への転換が、現実味を帯びてきたように思えるわけです。しかし未だ農家によって農業生産の多くが担われていること、法人経営も家族経営的に営まれているケースが少なからず存在することを踏まえれば、農業問題が今日もなお農業経済学において重要なテーマとして位置付いている点は変わりありません。

また本書の関心は国内にとどまらず、東南アジアやアフリカなどの発展途上国へと向かっています。ここからは、日本が抱えていた農業問題との共通点が見いだせる一方で、その国の資本主義化の進展に重大な影響を与えるほどの相違点が、実態調査を踏まえながら生き生きと描き出されています。

なお、本書は著者が指導する東京農工大学農学部 of 学部生を対象とした講義ノートを元に執筆されたものであり、経済学になじみが薄い理系学生にも農業経済学に関心を持ってもらおうという意図から、農業経済学に必要な基礎知識が平易に書かれています。久しぶりに農業経済学を見直したいと思われている方、またこれまで農業経済学と関わる機会の少なかった方にも、農業経済学への理解をいっそう深めるきっかけとなる本として、おすすめさせていただきたい一冊です。



『農業経済学講義』

著者：山崎亮一

出版社：日本経済評論社

出版年：2016年1月